

# 黒石津輕領の性格と支配

——宝永二年代表越訴を素材に——

浪川 健治

## はじめに

明暦二年、津輕藩四代藩主津輕信政の襲封に伴いその後見役となった旗本の叔父信英は、黒石・平内および上野国勢多郡のうちに五千石を分知された。<sup>(1)</sup>信英の死後、遺領は信敏領四千石と信純領千石に分けられて<sup>(2)</sup>いる。元禄二年、信純領は嗣子信俗の早逝により収公され、同年から同一年まで津輕藩預地となっている。津輕藩は上野勢多郡一五〇〇石と黒石周辺の領域五〇〇石とを交換し、不足分は新たに陸奥国伊達郡秋山村で、黒石津輕氏に与えられている。

旗本津輕氏とその支配については、わずかに『津輕黒石藩史』<sup>(3)</sup>『黒石地方誌』<sup>(4)</sup>などの郷土史編纂物のなかでふれられているに過ぎず、断片的で領主治政の功罪といった点に重点が置かれている。この様な事態は何よりも同領に関する根本史料の欠如に、その原因が求められる。<sup>(5)</sup>

本稿では同領の支配とその性格について津輕藩の史料によって考察を加えることとし、その素材として、津輕藩国日記<sup>(6)</sup>、宝永二年十一月二〇

日条に記された、黒石陣屋付諸村の百姓による津輕藩への代表越訴を取り上げることとした。

## 乍恐奉願事

一、御領分罷成在蔵御座候而町米ニ而上納仕候、同式重俵、但遺縄ニ而あふのふし大荒目ニ懸申候、

一、御貸方糶御蔵御座候而田打・種貸・荒くれ・仕付・草取迄、夫々御貸被下候故、脇方より別而利足物借不申罷有候処、近年ハ御貸方存之外御貸不被遊百姓迷惑仕候、

一、御新検（元禄七年検地）以後、上田老人役ニ付式百坪、此御取米納升五斗二升、中田ハ四斗四升、下田三斗六升、下々田式斗八升御取被成候、納升と申候ハ京升ニ而老斗三升三合三夕入申候、百姓屋敷方老坪四合三夕、定而百式拾坪納升五斗式升御取被成候、少々不作仕候而も田より御年貢出不申共、屋敷罷有候ハ五俵、七俵宛出申候故迷惑仕候、

一、百姓役米と申候ハ納升式斗、御新検之節ハ御定被成候御所、油・立木・綿役・糸役・山漆之実・菅筵・御馬屋卯時飼料人足之代共七

色ニ而納升式斗御取被成候、外百性耆軒ニ付同升ニ而野手米耆斗耆升御取被成候、高懸錢右耆石ニ四匁九分宛御取被成候、外山廻着替せおい人足代錢年ニより五七度出申候、御蔵ニ而焼炭ニ而耆俵宛、御馬屋之首尾不里申<sup>(不明)</sup>之代錢、又ハ蠟燭蔵江おから・御用繩大小三百□宛度々出申候、御普請之時分ハ堅すたわら米付人足、堰堀人足、糠、齋、山之いも、よもぎ、正月七草、同門松、又ハ立木、草ほうき、百性出、此節人足罷出立申候、漆かき、実取、水番人足、雪たれ御城之内不殘懸申候、其上御役人衆在々江御廻被成候得ハ庄屋・百性御賄仕候、

一、近卯年(元禄一二年)より御年貢前々より事之外御免議被成、あらくたけ、さくつ等迄撰取、上米御取被成候付難儀奉存候、如此故御年貢少々不納仕候得ハ人を取、年数被遊江戸江中間御登セ被遊候故、相残者共ハ田地働可申体無御座候故、潰百性出申候、  
一、同年より在蔵御潰被成、黒石ニ而御蔵を立置、御領分中一所納申候、此駄錢ニ納升ニ而初ハ四升、後ハ五升、近年ハ六升御取被成候、  
一、俵事之外御吟味被成候、

一、同年より御蔵番、一日五人宛百性仕候、遠方之者ハ事之外難儀奉存候、在蔵御座候内ハ銘々青盛江手前下仕候、其節ハ御貸方も御座候得ハ少茂不納仕候得而ハ百性・庄屋以相談上納仕候、殊青盛下も成兼申百姓も相談、六七月迄懸下仕舞申候、

一、巳之年(元禄一四年)改而三重俵、殊詰繩・あみ繩共御免議被成候処、原長右衛門殿御下り被成候節、惣百姓より高升弘前次ニ被仰付度願上申候得ハ御免不被下、高懸錢三步一御免被下候、

一、御取方段々ニ強御座候故、度々御願を申上候得共、一年替ニ御役人其年斗之儀御座候得ハ少茂御免無御座、事之外迷惑仕候、

一、米耆俵と申候ハ、前ハ三斗八升、近年ハ三斗九升五合御座候処、今年ハ四斗余ニ廻申候様御取被成候、

一、去年(宝永元年)より川欠普請御用柴杭、漆かき・実取・水番人足代被下候ハ遣捨被成候、

一、黒石御町人より出申候ハ足輕之食焼人足、堰堀人足、御伝馬、御供廻、鍵持、挟箱持迄不殘召連被成候、此代ハ一切不被下、殊ニより駄錢米御取被遊候得而も御蔵米不申時分、御伝馬御遣被成、地子野手相済申候上、江戸衆御下被成候得ハ食焼人足、毎日五人三人宛出申候、御城廻御普請方人足入用次第御遣被遊、御遣捨被成候、

一、少茂不作仕候得ハ馬苦勞町・浜海道・裏町、此辺江盗人隠入、在々江下り盗取申候得ハ、町ニ中立可有御座様被存候、在々諸百性田地時分ニ御座候得ハ、草臥罷有候を時分をうかゝひ盗取、事之外迷惑仕候、

一、春罷成、山々江野火入申候故、木萱焼捨り申候、此儀も耆年やり之御政道と存奉候、屋形様御次被仰付被遊度候、

一、近年御貸方無御座故、町より高利之物借り様、現在ニ迷惑ニ奉存候得共、当分渴申候故、借申候、

一、奉恐入候得共、近年ハ御年貢米江戸江御廻被遊候得ハ下々迷惑仕候、訳ハ上方ニ而直段能御売可被遊と思召、米も上々、繩俵共愁御吟味被成候、前ハ荒米三斗八升より其後三斗九升五合入、只今ハ四斗余ニ廻申候様奉存候、旁以百性迷惑仕候、御領分百性数式百軒之

余御座候之處、六七年以前より段々百性数潰、跡立申百性も有、又ハ田地ふり地罷成跡なき者も御座候、

一、当酉年（宝永二年）御取方、御升を耄打、志もふりあしにとふをかけ御取可被成申被仰付候處、諸百性右之段御免被遊度旨、度々奉願候得ハ其節ハ御免之様被仰付候得共、只今ハ霜ふりあしの様ニ御取被成候故、入方四斗之余ニ廻申候、春ニ成青盛江百性より下ケ申時分、少も不足仕候得ハ足米可出之由、爰元ニ而三重俵、青森ニ而取ほこし可申由、又ハ右之通ニ升を入可被成由被仰付候、

一、山々村々高無之者共、畑年貢大豆ニ而納申候處、一重俵大豆納候之處、今年ハ撰大豆被成、二重俵、此儀も迷惑仕候、大豆之儀ハ江戸江も御廻成間敷處、事之外御食議難儀奉存候、

一、時鐘、御町御座候處、此入方在々諸百性・高無共、人別御取被成候、大不作之時分より御足輕被仰付候得共、今年ハ改、拾年余算用立可申由、御吟味被仰付候、族ニより事之外難儀奉存候、

一、当酉年御年貢米悉御吟味被成爲、荒研・小糠・小米一粒も御座候得ハ御取不被成候、屋形様御納方より悉御吟味被成候、当年ハなめて御国元不作及渴命候處、御取方御食議故、当年耄年ニ而潰可申と奉存候、御藏江戸御役人長崎儀左衛門殿、御目付衆可罷有、前々之通引違、百性共少も異儀申候得ハ致縄下、牢舎可申付と御藏ニ而御吟味被成候、御藏と申候ハ、乍恐御太切奉存候處、庄屋・百性、御藏之内ニ而縄を懸申候段迷惑仕候、御米も当年分ハ御登せ不被成、古米御登せ被成候由承候處、事之外御吟味何共迷惑奉存候、御領分庄屋・百性、五代七代相統罷有候處、近年ハ長崎儀左衛門殿御台所

御仕置共御引さかし被成候故、迷惑仕候、

一、奉恐入候得共、御屋形様御次御政道奉願候、御同国殊御高之内御一家様御座候間、乍恐願御了簡度奉願候、以上、

黒石村肝煎	勘兵衛 印
株梗木村同	庄右衛門 印
野際村同	甚九郎 印
田中村同	甚兵衛 印
馬場尻村同	仁兵衛 印
小屋敷村同	太郎左衛門 印
飛内村同	仁左衛門 印
下目内沢村同	助之丞 印
上目内沢村同	吉右衛門 印
野添村同	五右衛門 印
牡丹平村同	勘右衛門 印
石名坂村同	三郎兵衛 印
豊岡村同	甚九郎 印
小抗野村同	小左衛門 印
下山形村同	源右衛門 印
上山形村同	孫右衛門 印
不動館村同	兵三郎 印
大川原村同	嘉左衛門 印
沖浦村同	彦十郎 印
温湯村同	郷右衛門 印

宝永二酉年十一月十二日

黒石御領分中不残

(津輕藩大目付)  
牧野伴右衛門様

足立源左衛門様

要求を要約すれば、元禄七年検地による収奪体系確立を踏まえ、(1)詐取的方法による年貢増徴、(2)多岐にわたる臨時の役銭・夫役・現物・賄の賦課と恒常化、(3)夫食貸与廃止・野火管理の不十分さなど、農業生産への領主関与の喪失が指摘される。しかし何よりも重要なのは、(4)、特に元禄一二年以降、年貢米詮議、同一四年には三重俵が強制・強化されるに至ったことである。これらは第一六条に明らかな様に江戸廻米の実施と密接に結びつき、大量の米移出の必要性は逆に(1)～(3)の事象を現出させずにはおかなかったと言えよう。

従って、同越訴がなされた歴史的な背景としては(1)元禄七年検地と、(2)同領からの廻米のあり方を考えることが出来よう。それは、同領における領主支配のあり方を生産と再生産の二面から明らかにすることに他ならないのであり、本稿の課題である性格と支配の解明への有力な素材たり得るものと考えることができる。

## 註

(1)寛永二〇年、小姓組、正保二年、慶米三〇〇俵を給せられ、慶安三年、書院番をへて、明暦二年、分知により五千石を得、慶米は納められ、寄合に列する(『寛政重修諸家譜』)。

(2)黒石周辺の小屋敷、飛内、下目内、馬場尻四ヶ村と勢多郡諸村。

(3)森林助、昭和九年『黒石藩史』として刊。後、昭和五十一年、歴史図書社復刻。

(4)佐藤耕次郎(雨山)、昭和九年刊行。後、昭和四八年、津輕書房、復刻。

(5)昭和五二年に発行された『平内町史』は、黒石津輕氏の平内支配を中心とする史料を下巻に収録し貴重である。ただし、それにも拘らず上巻の通史部分の分析は津輕藩政との混同が目立ち、極めて信ぴょう性に欠けている。例えば、同書二一四ページには「検地」の項があるが黒石領の検地については元禄七年と享保年間に実施された事を記すのみで、二一八ページにおいて検地の結果、確定した収奪体系が述べられているが、これは津輕藩のものである。

(6)弘前市立弘前図書館蔵、津輕家文書。

## 第一章 元禄七年検地について

現在の所、黒石陣屋領の検地については、既に指摘した明暦二年の分知に伴う知行割検地帳のほかは、元禄七年検地も含め検地条目・検地帳とも知られていない。

元禄七年検地に関するものとしては、『黒石御領日記』<sup>(2)</sup>に「黒石田方御検地入候節上中下場所附ノ覚」が記され、六尺五寸尺を用い田方は上ノ下、畑方は上ノ下々までに等級別したこと。「田境」・「支配切ノ村境」・「百姓面々ノ田境」にそれぞれ杭を打ち印立したことが知られる。

『津輕黒石藩史』では「検地覚」が記載される。竿は六尺五寸、石盛は

田方上田一石三斗から二斗下り、畑方は上畑一合、中畑六斗、下畑四斗、下々畑二斗としてゐる。両史料とも類似の内容で、他の一次的史料に依拠したものと考えられるが、なお全幅の信頼を置く事はできない。同検地が農民支配にいかなる役割を果たしたかを、ここでは生産力把握の変化に視点を置いて考えてみたい。このために使用する史料は元禄二年の「黒石平内巳年郷帳」(以下、「巳年郷帳」) 同七年の「黒石平内戌年郷帳」(以下、「戌年郷帳」)である。この二つの郷帳には明確な差異がある。その一部を対照してみたい。

#### A 「巳年郷帳」

##### 黒石村

役数八百五拾六人四分九厘 但屯人役百五拾歩より段々式百歩迄積、

一、高六百八拾四石八斗五升五合 田方

此内七石式斗七合 畑直新田高入

四拾四石五斗壹升七合

肝煎持高口米外諸懸物無之、

但三百歩耄反ニ付耄石三斗代積を以地面上中下石盛積合平均高如此

内

百四拾三人七分六厘役

百拾四石四斗三合 当検見引

残而

七百拾二人七分三厘役

五百七拾石四斗五升式合 有高

此取米三百四拾式石式斗七升壹合

高ニ四ツ九分九厘七毛  
有高ニ六ツ

役数四拾七人六分壹厘七毛 但屯人役式百歩

一、高九石五斗式升四合 畑方

此外四石式斗九升五合 田成田高江入

〔但三〕百歩耄反ニ付三斗代積を以地面 位石盛積合平均高如此、

此取米七石壹斗四升七合

高ニ七ツ五分四毛

役数式拾式人六分壹厘八毛 但屯人役式百歩積

一、高拾九石六斗六合 屋敷方

三百歩耄反ニ付耄石三斗代

此取米拾九石六斗六合 高ニ直くみ取

田畑屋敷

高合七百拾三石九斗八升五合

取米合三百六拾九石三升四合

高ニ五ツ壹分六厘八毛

外

一、米拾四石七斗六升壹合 口米

但取米耄石ニ付四升宛、

一、同五石耄斗式升 野手役・油役

但家別懸家数三拾二軒分、耄軒ニ付野手耄斗壹升、油役

五升代、

米都合三百八拾八石九斗五合

一、錢壹貫百三拾匁貳分四厘 夫役

但黒石分拾貳ヶ村金七拾兩相定、金納兩替年々不同有之

候、当兩替壹兩ニ付八拾七匁、成米拾石ニ付貳拾九

匁五分四厘ハ毛宛

一、同貳百九拾五匁八分四厘 立木・蒔代

但成米壹石ニ付七七分七厘宛、

一、同壹貫貳百拾四匁四分五厘 春夏山作代

但百姓壹軒ニ付五拾目宛定、然共身代不勝手成百姓ハ

四拾五匁より段々九匁壹分六厘迄取納仕来候、

一、同七拾六匁八分 山漆実代

但家別懸家数三拾貳軒分 壹軒ニ付壹匁宛

一、錢三拾貳匁 役麻代

但家別懸家数三拾貳軒分、壹軒ニ付壹匁宛、

一、同五拾匁貳分 役綿代

但家別懸家数三拾貳軒分、壹軒ニ付壹匁六分宛、

錢合貳貫八百五匁五分三厘

## B「戌年郷帳」

黒石村

反別五拾七町四畝貳拾八歩

但上田壹反歩ニ付壹石三斗代

中田壹反歩ニ付壹石壹斗代

一、高七百四拾壹石三斗五合 田方

此内四拾六石四斗壹升九合

肝煎持高口米諸懸物無之、

此取米四百四拾四石七斗八升三合

高ニ六ツ

反別四町貳反四畝貳拾歩

上畑壹反歩ニ付六斗代

中畑壹反歩ニ付五斗代

但  
下畑壹反歩ニ付四斗代

下々畑壹反歩ニ付三斗代

一、高拾七石貳斗四升壹合 畑方

此取米五石九斗貳升六合

高ニ三ツ四分三厘七毛

但上五ツ、中四ツ、下三ツ、下々貳ツ成定法御座候、

反別壹町六反九畝壹歩 但壹反歩に付壹石三斗

一、高貳拾壹石壹斗三升 屋敷方

此取米貳拾壹石壹斗三升 高直くみ取

取米合四百七拾壹石八斗三升九合

高ニ六ツ五厘貳毛

外

一、米拾八石八斗七升四合 口米

但取米壹石ニ付四升宛

一、同三石六斗三升 野手米

但家別懸家数三拾三軒分、壹軒ニ付壹斗壹升宛、

一、同六石六斗 夫米

但家別懸家数三拾三軒分、高持百姓壹軒ニ付式斗宛、

米都合五百石九斗四升三合

一、錢三貫四百拾五匁六分四厘

春夏山作代、立木代

夫役代・蒔代

但高拾石ニ付四拾九匁壹合五厘四毛宛

「巳年郷帳」では「高」は反別に平均石盛（田方・屋敷一石三斗畑方三斗）を乗じたものであり、生産高を示すものの生産力把握の点からすれば極めて不十分なものである。一方、現実の生産量は有高に示されている。年貢は有高に租率を乗じて取米を算出し、高に対する租率は、現実の年貢量から高に対して逆算しており、それを帳簿上では高に租率を乗じたように処理しており、従って極めて低率になっている。

この「巳年郷帳」に見られる高把握のあり方は、貞享以前の津輕藩の地方知行制をそのまま分家に際して踏襲したものと思われる。<sup>(5)</sup>

すなわち、同藩の地方知行制では、知行割に際しては一反一石三斗の石盛を原則として採用している。これは「巳年郷帳」に記される様に「上中下平均石盛」として機能しているのである。知行高あるいは村高は右の如くに算出される。一方、収取については有高により実現される。

それは、一人役の耕地に対する斗代の決定により得られる。

本来、石高制のもつ二つの原則は、ここでは知行原則↓高、収取原則↓有高に分化しているのである。この両者間には、一人役が「百五拾歩より段々式百歩迄積」と町反歩制との間に一定の換算基準を成立させていることで、石高制の一応の貫徹が見られるのである。

「戌年郷帳」では、かかる高と有高の分化は消滅し、統一的高把握が実現されている。ここでは、田方にその変化を見ることが出来る。

「戌年郷帳」では取米は高に租率六ツを乗じて算出されており、有高記載は消えて郷帳の高が生産||收穫量を示す唯一のものになったことを知ることが出来る。これは何よりも同「郷帳」における生産力把握のあり方から理解される。田積は反別に一元化され、田位が設定されて上々下々までの四等（同「郷帳」の他村には下々まで記される。）が石盛一石三斗から二斗下りで決定されている。すなわち、反別による絶対的な面積の丈量―付位―石盛―石高という石高制一般の生産力把握が、「郷帳」の上では有高を高に統一することにより実現されたのである。

次に、両「郷帳」間の諸役賦課の変化である。「巳年郷帳」段階では雑年貢（役綿・麻・漆・油）から小物成（蒔・立木）という雑多な賦課が、夫役（春夏山作・夫錢）・野手役・口米に加えて行なわれていたことが知られる。それは米納、あるいは錢納（錢納と称しても、実質的には領国貨幣||津輕銀による）形態である。この場合、論理的には本年貢負担のために水稻耕作に要する以外に農業経営内に別個に労働の集積を必須とした現物納段階ではないものの、特に畑年貢とそれら雑年貢代錢納の二重賦課により過重な収取となったと考えられる。事実、油役・役

麻代については「御年貢上納仕候畑之内ニ而御座候得ハ弥重年貢ニ罷成」と当時においても認識されている。<sup>(7)</sup>

「戌年郷帳」では雑年貢・小物成は、特に畑方生産の把握深化と共に、本年貢収奪強化のために減少し、その賦課形態も変化する。

「巳年郷帳」にみる徴租方式は、同領で明暦の分知とそれ以降、独自に制定した形跡はなく、津軽領における前期の方式を基本的に踏襲したと思われる。それは夫役と諸役を負担し、「抱地」と称される耕地を保有する役百姓<sup>Ⅱ</sup>「御百姓」を本百姓とするものであった。従って賦課の方式は夫役を中心に軒がかり制をとり、高がかりは付加税の性格をもつものに限られている。

「戌年郷帳」では更に次の点が注目される。それは夫米の賦課にあたり「高持百姓」が対象となっていることである。温湯村の場合では屋敷地について、

反別三反四畝式拾九歩

但百姓屋敷苞反歩ニ付苞石三斗代

高無百姓苞反歩ニ付七斗八升代

一、高四石五斗六合 屋敷方

此取米四石五斗六合 高直くみ取

とされる。屋敷持は百姓（高持百姓）と高無百姓から構成されている。

『黒石領御日記』では「田方五人役以上耕候者百姓卜定、黒石行人夫モ相勤、四人九歩九厘九毛迄高無百姓卜定」としている。同史料の成立は中期以降でかつ平内地方の規定のため直接の根拠とはしがないのであるが、「戌年郷帳」に拠れば「高持百姓」である事が負担の基準となつて

いるのは夫米のみである。温湯村の場合、八軒の「高持百姓」が負担する。

諸役のうち「春夏山作代」とは、「田畑用水普請等之節、百姓より出候人夫日用」<sup>(8)</sup>に用いるものであり、実質的には夫役そのものに他ならない。「巳年郷帳」段階でも軒がかり制をとる同役の賦課は、「不勝手成百姓」の存在によって一律に徴収することが困難となつてゐることを知ることが出来る。ともあれ、同時期には夫役を「夫役」と「春夏山作代」の二通りに徴収し、川除用水普請という農業生産の維持・発展のための夫役を「春夏山作代」として、それ以外の領主のための夫役を「夫役」としたと考えらる。

「戌年郷帳」で夫役の分化が進み、米納の「夫米」と銭納の「夫役代」「春夏山作代」に三分される。「春夏山作代」が前述の性格を持つとすれば、領主のための夫役を形成する「夫役」の分化は如何なる意味をもつものであったのか、ここでは十分明らかにし得ない。ただ、当面の問題としては「高持」「高無」という農民把握との関係がある。<sup>(9)</sup>この点で言えば「夫米」がなお「家別」に「高持百姓苞軒ニ付式斗宛」賦課されることを注目すべきであろう。これと先の『黒石領御日記』による高持・「高無」規定を考え合わせれば、一定程度の耕地を保有し（五人役）、そのことにより夫役のうち「黒石行人夫」に相当する「夫米」をも役負担するものが「高持」であり、零細な耕地を保有し、夫役のうち再生産基盤の保障に投入される部分を主に負担する「高無」という構造となつてゐる。このことは前代において、「一年作人」<sup>Ⅱ</sup>一年切りの請作地耕作者にとどまった小百姓の一部と、没落過程にあつた役百姓下層とを新に「高無」として把握することであつた。



従って、元禄七年検地は「高無」層の創出に見られる如く、小百姓の展開を基底に、それを権力的基盤とする基調の下に実施され、これを踏まえて、生産力把握の深化に見られる様に石高制に基づく徴租方式を確定させる意義をもつと位置づけられるのである。加えて農民闘争が何故、この宝永期に至り初めて当地方において代表越訴の形態をとり得たかの理解もここに求められよう。代表越訴型の一揆の前提は、一般に小農展開に基礎を置く村落共同体の成立にある、と考えられる。そして村役人層、当越訴における肝煎が、小百姓を代表し要求の主張者として初めて地域的に姿を表わしたと言える。このことは元禄七年検地が小百姓を「高無」としてとらえ、領主による共同体再編の意味を強く持つものであったことも示唆するのである。

#### 註

- (1) 拙稿「前期農政の基調と展開」(長谷川成一編『津輕藩の基礎的研究』国書刊行会 昭和五九年、所収)
- (2) 弘前市立弘前図書館蔵。
- (3) 同 右。
- (4) 同 右。
- (5) 前掲拙稿参照。
- (6) 国立史料館蔵、津輕家文書、「津輕伊織上ヶ地御取ヶ并小役米銀窺帳」(元禄三年)では、「野手米」は「越中守領内(津輕藩領)にてハ荒地多、百姓勝手次第第二開セ申候故、高拾石ニ付米四升宛」を申し付け、「役油之代」「蒔役」「立木代」は「越中守領内にて不申付」、「立木代」に見られるように「薪ニ而百姓より相納可申答」

— 現物納を「代銀」納としたものである。

(7) 同右史料。

(8) 同右史料。

(9) 津輕領(藩)の農民把握については、拙稿「津輕藩前期農政の解体」

(『日本歴史』四三〇号)、滝本寿史「宝暦・天明期津輕藩農村の諸問題」(『弘前大学国史研究』第七一号)参照。

## 第二章 江戸廻米をめぐる

越訴の直接の、そして最大の要因は、年貢米詮議強化・三重俵採用などの新俵非法が、「しもふりあし」など詐欺的増徴策を伴い、かつ暴力的に強行されたためと考えられよう。

それでは、何故、当該期の陣屋支配下でそれらが強行されねばならなかったであろうか。右の要因は訴状第一六条に明らかな様に、同領年貢米の払方―江戸廻米の「近年」からの実施と一体のものと言えよう。そこで本章では、同領からの廻米のあり方の検討を通じて越訴の前提の一側面を見てみたい。

まず、訴状に言う領主米の払方を見ておきたい。表(1)は元禄一六年と宝永元年の一部予定を含めた、黒石領からの津出米の払先と量である。これによると、元禄一六年には前年が不作のせいもあるが津出総量は一、二八三石余に過ぎず、払先も田名部・松前であるが、翌宝永六年には総量三、四一七石余に達し、その内江戸払米が二、七五三石余と八割を超えるに至る。宝永四年には津出米二千石、同四年三千石、同五年三千石

表(1) 黒石領移出米

元禄16年黒石領津出米			
日 時	払 先	津 出 量	
3月6日	松 前	2 3 7 石	
		7 8 石 6 斗 5 合	
	田 名 部	1 9 7 石 5 斗	
		2 1 9 石 6 斗 2 升	
		1 1 8 石 5 斗	
4月1日	田 名 部	5 3 石 3 斗 2 升 5 合	
		5 9 石 2 斗 5 升	
10月24日	平 内	8 0 石	
12月12日	平 内	1 2 0 石	
		1 2 0 石	
小 計	田 名 部	6 4 8 石 1 斗 9 升 5 合	
	松 前	3 1 5 石 6 斗 5 合	
	平 内	3 2 0 石	
総 計		1, 2 8 3 石 8 斗	

宝永元年黒石領津出米（含予定）			
日 時	払 先	津 出 量	
3月3日	田 名 部	9 3 石 2 斗 2 升	
		1 4 8 石 5 斗 2 升	
		1 1 9 石 9 斗 9 升 9 合	
	松 前	3 6 石 3 斗 4 升	
		4 5 石 4 斗 2 升 5 合	
4月17日	平 内	8 2 石 9 斗 5 升	
28日	江 戸	2, 0 5 3 石 2 斗 5 升	
5月5日	平 内	3 9 石 5 斗	
8日	江 戸	7 0 0 石	
12日	松 前	9 8 石 7 斗 5 升（未移出）	
小 計	田 名 部	3 6 1 石 7 斗 3 升 9 合	
	松 前	1 8 0 石 5 斗 1 升 5 合	
	平 内	1 2 2 石 4 斗 5 升	
	江 戸	2, 7 5 3 石 2 斗 5 升	
総 計		3, 4 1 7 石 9 斗 5 升 4 合	

津軽藩国日記 宝永元年五月二十五日条から作製。

と津輕藩国日記には同領からの津出米量が記されている。

その場合、黒石領からの廻米はいかなる形で行なわれたのであろうか。

一筆致啓上候、弥御堅固御勤可被成旨珍重奉存候、然ハ此方蔵米千  
百六拾三俵売払申候、前々之通焼印札持せ一兩日中より浜下ヶ仕候、  
無相達相通候様米留御役人中江被仰付可被下候、尤青森之浜町加賀  
屋安兵衛方迄遣申事ニ御座候、

一、平内用米四拾三俵、近日遣申度候、

右二口、尤御印紙、今日御役人中迄申進候弥被仰付可被下候、

一、去年收納高之方、青森津出・平内用米共ニ石高相認、御印御役人  
中迄差越申候、右書付之内段々御印紙申請度候間奉願候、恐惶謹言、

五月廿四日  
(宝永元年)  
(黒石家役人)  
三浦九左衛門

福士庄左衛門

(津輕家用人)  
木村奎之助様

右之通、靱負(津輕氏・家老)江申達之、黒石より当年津出米員

数之儀、御留守居組頭中江靱負より相尋候処、左之通御座候、

(略)

右は、黒石家役人から津輕藩に対し、黒石領米の移出を認可を求めるものであるが、ここに示される様に、同領からの移出は独自に自己裁量でなされるものではなく、本藩の同意を必要とする。しかもそれは本藩によって移出量の増減の規制を受けた。

この黒石からの移出は具体的には次の様な過程をもつ。まず黒石領陣屋役人から津輕藩用人にその量を記した願書が出され、用人から家老に上申されその認可を得る。次に家老は留守居組頭にその旨を伝え、留守

居組頭はそれに基つき「湊御印紙」を発行、これが青森町奉行に示されて同港からの廻米が行なわれる。この過程は、実は津輕藩が地方知行制をとっていた貞享期以前の同藩給人払米方を踏襲したものに他ならない。<sup>(3)</sup>

究極の所、黒石陣屋―旗本津輕氏の財政は本藩の強い規制下にあり、むしろ実質的には地方給人のそれに近いものであったと考えられる。かかる黒石領において江戸廻米が実施され、以前に倍する量が移出されたとすれば、それは津輕藩政との関わりで考察されるべきであろう。当期の津輕藩の給人財政の状況は次の史料により窺われる。

一、当時御家中之面々以外勝手不如意ニ罷成困窮之処、逸々可申上様ニ無御座候、身上も成統相勤候面々十分之一ハ有御座間數様ニ及承候、

右は、宝永二年の桜庭太右衛門上書である。<sup>(4)</sup>桜庭は数回にわたり上書を提出しており、宝永六年の上書では知行高百石の給人の場合、物成は六ツで六〇石〓四斗入俵百五〇俵を得るが、これを一日換算するなら一斗八升となり錢三三〇文となるという。仮りに家内一〇人では、朝夕に五升を要する。残り五升三合余を錢一六五文とし、味噌・塩・薪等を調える。これ以外の必要経費、例えば衣類・使用人の切米は算段の手段がなく、二食のうち一食は粥とするか、非常の日は使用人を山野にやり薪等をとらせるなど生活を切りつめ、日を送る有様としている。「大小共ニ何も御奉公ト奉存、相統之覚專一ト及承之候得共、先年之不作(元禄八・一五年)以来御家中數年差詰り(略)、只今左様之働も不罷成」状況が一般化、それは「百石十人之積ハ中分之積ニ而御座候、其家ニより十人余ハ御座候得共、十人より少ハ希ニ御座候、乍去高五百石ニ而五十人、

千石ニ而百人而家内ハ無御座」ものであり、中・下級家臣ほど困窮の度が強く、上から借知により藩財政を補充しようとする、藩権力との間に軋轢を生じていくのである。

藩財政に圧迫を与えず、また農民の低抗を必然化する増徴をも指向しないで給人財政の改善を計った時に具体化したのは、給人米を低米価の国許での地払から相対的に高額な他領、大坂・江戸市場への給人裁量による販売を認めることであった。

一、御家中知行米之内人々勝手次第上方江為差登相払候儀、御家中之為可罷成哉之旨被仰出候間、於爰元勘定奉行兩人江致相談候処、人々勝手次第大概百石・貳拾石宛と相定、依願相渡、津出被仰付候（略）  
上方廻し仕候得ハ御家中之為罷成、如意金子も上方より参候得ハ金子も只今之様不自由ニハ有之間敷と存候（略）

覚

一、御家中知行米、上方江差登セ払申度族ハ勝手次第可申立候、大概百石・貳拾石宛津出可申付候、万一海上荷打等有之節ハ、其捨り米高を以割合差引相立可申事、

一、右廻米当分御米船積合可申候、以後ハ御家中廻米と相定、年々相廻候ハ、御国江金子も多入可申儀ニ候、必竟御家中永々成統候様ニと被思召、右之通被仰付候間、望之者ハ勝手次第可申出候事、

一、津出御印之儀ハ前々石高を以無相違可被下置候事、  
右之通被仰出候、面々手廻ニも可能成候間米持合候者ハ勝手次第津出之儀可申立候、

以上

（宝永二年）  
三月

黒石領からの領主払米は、訴状第一条には「一、御領分罷成在蔵御座候而町米ニ而上納仕候、同式重俵但遣縄ニ而あみのふし大荒目ニ懸申候」とあり、元禄七年以前にはおそらく、町米として地払を主とし、他払も田名部・松前という北東北の局地的な市場で流通したと思われる。黒石領の宝永元年に見られる江戸廻米の開始は、同領からの領主米移出が津輕藩の規制下にあり独自の経済を完結させるものでなかった以上、津輕藩中枢の政治的判断を前提とするものであろう。その場合、宝永三年に家中払米の上方への勝手払を許可した津輕藩を参考とするならば、元禄中期からの飢饉を直接的な契機とする領主財政の悪化が基底にあり、江戸常府を義務づけられた旗本津輕氏にとっては津輕藩給人以上に蔵米の高額での売却が緊急の課題となり、旗本である故に江戸がその払先になったと考えられよう。<sup>(7)</sup>

註

(1) 越訴状および津輕藩の黒石陣屋役人尋問書（津輕藩国日記、宝永二年一月二〇日条）によれば、「升之上米一倍入計を懸申候、升の釣金物之上ニ米所々ニ見申様ニ計申」ことであり、黒石役人の弁明では「前々江戸江参候米、三斗九升入と申、俵三斗五六升なりて無之ニ付、右之通計立不申候得ハ減過分相立候故、右之通申付候由候」と移出量確保のためにとられたことが記される。恣意的収奪は江戸廻米強制と密接に結びつき、領主再生産構造に深く関わるものであったことが明らかになる。

(2) 津輕藩国日記、宝永元年五月二五日条。

表2 元禄9～宝永7年の米価

	A	B	C	D	備	考
元禄9年10月	30匁3分			1,114		
10年4月	45匁			1,043		
11年				1,200		
12年10月	32匁6分	48匁	0.68	1,391		
13年10月	27匁			1,243	豊作	
14年6月	38匁5分			1,371	凶作	
15年8月	61匁8分				凶作	
11月	82匁5分			1,286		
12月	100匁					
16年1月	70匁				当年一体不順ニ而候得共、大凶年にも	
	87匁5分				無之候、然所米値段以外高値ニ而死人	
5月	111匁				有之候事ハ鯨ヶ沢笠嶋勘左衛門(略)	
	106匁3分				此四人過分之沖出願立候故米不足ニ罷	
6月	140匁	75匁5分	1.85	1,186	成、死人多ク出申候(永)	
宝永元年3月	67匁5分			1,129	豊作「米値段段々高値」(平)	
2年2月	45匁	86匁	0.52	1,014	不作	
閏4月	43匁8分	75匁5分	0.58			
7月	60匁					
3年4月	73匁8分			1,100	中作、米不足、町在御用米銭取立(平)	
4年1月	60匁				半作	
4月	63匁7分	79匁	0.81	1,143		
10月	55匁	85匁	0.65			
5年3月	90匁			1,057	豊作、買米制実施、米不足高値「諸人 甚難義」(平)	
6年11月	26匁3分			1,014	豊作「米値段安ク御迷惑之由」(平)	
7年				0,943	豊作	
A: 津軽領内町米1石の価格(匁)					(平) 平山日記	
B: 津軽領内1両換算					(永) 永禄日記	
C: 津軽領内町米1石の価格(両)						
D: 江戸米1石当り米価						

A: Bは「永禄日記」(みちのく双書1)、「平山日記」(同17)、Dは、『近世物価史研究』(山崎隆三)。

(3) 「御印諸式」延宝九年。『津軽家御定書』  
叢書3、昭和五六年)所収。  
(4) 国立史料館蔵、津軽家文書。

(国立史料館編、史料館

(5) 同右  
(6) 津軽藩国日記、宝永三年三月一五日条。  
(7) 津軽地域の米価の当該期の変動は次の通りである。

## まとめにかえて

### ―黒石津輕領の性格と越訴―

越訴の結果については、明らかではない。ただ、同年一月二〇日、黒石陣屋領大目付・役人・目付・代官の五人が津輕藩に換問され尋問をうけた。<sup>(1)</sup>

一、百姓共江夫食・種貸不申事、

一、百姓共屋敷、百貳拾坪ニ而五斗二升納候儀此高何程当申候哉之事、

一、高懸碓石四匁九分取候儀、山作銀も入候得而之事候哉之事、

一、少分之未進ニ而百姓手前より人を江戸江登せ数年罷有候事、

一、納米之節、米壹駄二六升宛取候事、

一、納升、京升之事、壹斗三升三合三夕入申候事、

一、志毛ふりあしと申納方有之申之事、

一、蔵米、青森江下、升を入、減米從百姓出申候事、

一、百姓之内江戸江罷登候者、江戸ニ而抱瘡相煩目悪敷罷成御屋敷より罷出相果候由、親兄弟江申聞候哉之事、

一、百姓共江戸詰之内、宿々より金子登候得而も届候哉、一切談不相

知事、

一、如斯申聞候と而庄屋・百姓・町人杯御會議被成候而ハ此方共如何敷候間、御會議及申問敷と可申聞候事、

右によつて、代表越訴をうけた津輕藩の対応を見てみよう。

まず、領主内部において訴状のうち何が「非法」とされたかであるが、領主による再生産保障機能の欠落（第一項）、年貢・諸役の過重（第二・

三項）、未進百姓の恣意的使役（第四・九・一〇項）、收取の詐取性（第五・六・七・八項）が問題となっているのである。農民側要求は右の諸点を含むものの、それらを惹起した大量の江戸廻米の強行と、それに付随した年貢米詮議強化・三重俵強制などの、新儀の非法は一切言及される所ではなかった。それは江戸への廻米が、領主財政悪化による津輕藩の窮乏打開策として黒石陣屋に許したものであれば、当然の結果であるとも言えよう。それに拘らず、黒石陣屋支配の領主支配の独自的部分については、農民側の越訴項目を確認する形をとつて津輕藩は介入せざるを得なかった。それは何よりも、この越訴が単に肝煎による訴状提出にとどまらず、小百姓をも含む多様な闘争として展開する可能性を秘めていたからと思われる。

一、頃日承候得ハ、黒石領百姓共前々と違当年ハ御收納米等稠敷有之候、此分ニ而ハ続申問敷候間、弘前江罷越御願申上候而承引無御座候ハ、江戸江も罷登可申杯と粗取沙汰承候ニ付、大切成儀と存、各江面談様子承度御越候様ニと申遣候、尤家老中も右之段被申候付承候と申聞処（略）

右は、黒石役人を召換した際に、津輕藩が「申談」じた覚の最初の部分である。<sup>(2)</sup>

ここに、農民側の行動が代表＝肝煎の弘前への越訴にとどまらず、幕府上訴の計画をも併せ持つものであり、少くとも津輕藩が黒石役人への事情聴取を行なわざるを得なかったのは、右の江戸上訴という事態を深刻に受けとめ、その回避をはかったために他ならない。しかしそれは、「如斯申聞候と而、庄屋・百姓・町人杯御會議被成候得而ハ、却而此方

共如何敷候間、御金議及申間敷と可申候事」と、あくまで聴取の範囲を陣屋役人のみに限定するにとどまっている。

右の点は、何よりも黒石陣屋支配をめぐる権力の関係と、それを見すえた農民闘争の展開と対応とに集約されよう。

黒石陣屋と津輕藩、および幕府の関係は次の様に示される。

陸奥国津輕郡之内四万五千石、上野勢多郡内二千石、都合四万七千石<sup>目録在</sup>別紙事、内四千石津輕左京（信敏）、千石津輕一学（信純）可進之、残四万二千石宛行之訖、全可領知者也、仍如件、

寛文四年五月 御朱印筆者杉浦伊右衛門

津輕越中守とのへ<sup>3</sup>

すなわち、黒石領は幕府から朱印状を得ない「内分」の分家であり本藩との関係においては、

明暦二年二月二日遺領を継<sup>時に</sup>十一歳 この日五千石の地を叔父十郎左

衛門信英に分ちたまふ。しかりといへども、なを四万七千石の軍役をつとむ。（略）元禄二年津輕伊織信俗（一学信純嗣子）嗣なくして家たえ、その采地千石をおさめらる。これより信政四万六千石となる。これさきに分知せし所なりといへども、信政が封禄のうちたるによりてなり（略）<sup>4</sup>

と記されている。

すなわち、黒石津輕氏は「奉公」―軍役の面で、大名津輕氏の役高に包含されるものであり、軍事力編成と軍備所有を内容とする独自の軍事力を構成するものでなく、従って軍事指揮権もまた津輕藩主に帰属する

ものであったのである。

この点に、黒石領からの蔵米移出が、津輕藩の留守居組頭―家老の下に実施され、同藩の番方機構のなかに組み込まれており、地方知行制期の給人米移出と何等かわる所がなかった基本的な理由があらう。黒石陣屋領は、確かに独自の検地を行使し農民支配を展開したことにより、政治的には個別領主の位置を確保しつつ、その再生産のあり方において津輕藩の領国支配に完全に包摂されるものであったのである。

従って「御屋形様次御政道」の要求を掲げる百姓が、「御同国、殊御高之内御一家様御座候間、乍恐願御了簡度奉願候<sup>5</sup>」と津輕藩主による事態の解決を求める根拠もそこにあったと言えよう。ここでは単に「御同国」―地縁、「御一家」―血縁―本分家関係が基軸にあるのではなく、両者が「御高之内」であることに最大の越訴の正当性があつたのである。すなわち、ここでは地域的な権力の分散性のみではなく、幕藩権力の編成の具体的なあり方を認識し、その上に立って有効な一揆の方法―越訴を展開させていったと見ることができよう。

宝永二年代表越訴に明らかのように、黒石津輕氏はその陣屋支配において、元禄七年検地とそれによって確定される收取体系にみられる如く、津輕藩とは別個の地代收取を貫徹させている。そしてそれは、恣意的なまでに強制力をもつ行政・裁判権という経済外強制により実現されている。

しかしながら、権力編成のあり方においては、知行に対する基本的奉公形態としての軍役の体系に表現される幕藩制の下での領有関係の上では、大名津輕氏の軍役のうちに包含されており、それに媒介されること

によって將軍との間に、知行―御恩―奉公関係が取り結ばれていたのである。

この軍役―軍事編成と軍備は人民支配の側面では、暴力装置として経済外強制の根幹を形成するものであるにもかかわらず、黒石津輕氏は自らのみではそれを編成し得なかったのである。「内分」の分知としての内容は、黒石津輕氏の場合、封建地代収取權と、それを実現させる裁判・行政權―一定の経済外強制の分与に他ならない。そして「『本家』の領主權<sup>6)</sup>」とは、津輕藩による奉公―軍役関係における同領の包摂であり、経済外強制の根幹部分の掌握であったと言えよう。

宝永二年の代表越訴において、黒石領百姓がその封建地代収取を恣意的なものとして「屋形様御次」―津輕藩同様の「御政道」への転換を求めることで糾弾し、「御高之内御一家」と津輕藩と同領の、領主編成上における位置関係を踏まえる訴願を行ったことは、かかる黒石津輕領の性格を認識したものであったと考えられよう。

註

(1) 津輕藩国日記、同日条。

(2) 同 右。

(3) 『寛文朱印留』（史料館叢書1・2）

(4) 『寛政重修諸家譜』 卷七百二十五。津輕信政。

(5) 越訴状第二一条。

(6) 竹内利美『家族慣行と家制度』（恒星社厚生閣 昭和四四年）によれば「『内分』においては、正式に直接の分封形式をとらない。そこでは、幕府の承認のもとに『本家』から分封される形をとるので、

分知した土地には『本家』の領主權がなお及んでいる」とされる。  
同書一五〇ページ。

（青山学院大学講師）